

養殖魚介類の魚病被害状況							
(要約)平成13年～17年度における養殖魚介類の疾病の発生と魚病被害の状況を調べた結果、 <u>海産魚類</u> の養殖における魚病被害は増加傾向にあり、生産額に占める魚病による被害率も高いことが明らかになった。一方、 <u>クルマエビ養殖</u> と <u>淡水魚類養殖</u> の魚病被害は年による変動が大きく、魚病による被害率も海産魚類養殖に比較して低かった。							
水産海洋研究センター 海洋資源・養殖班					連絡先	098-994-3593	
部会名	水産業部会	専門	水族病理	対象	養殖魚介類	分類	指導
普及対象地域							

[背景・ねらい]

沖縄県における魚介類の養殖生産量は増加傾向にあり、魚介類養殖の進展にともなって、魚病被害の拡大が危惧される。そこで、魚病の発生と魚病被害の実態を明らかにするため、アンケートと聞き取り調査を実施した。

[成果の内容・特徴]

1. 海産魚類の養殖における魚病被害は平成13年度が3千百万円、14年度8百万円、15年度6百万円、16年度1千6百万円、そして17年度に4千4百万円であった。しかし、13年度のクロマグロとマダイのイリドウイルス病による大量斃死で被害を受けた2千9百万円を除くと魚病による被害は年々と増加傾向にある(表1)。
2. クルマエビ養殖では平成13年度が6千万円、14年度3億4千万円、15年度2億1千万円、16年度1億円、そして17年度が2億4千万円と年による変動が大きかった(表1)。
3. 淡水魚類の養殖では平成13年度が5百万円、14年度9百万円、15年度百万円、16年度2百万円、そして17年度に6百万円と年による変動が大きかった(表1)。
4. 平成17年度の魚病被害額は2億9千万円であった。魚病被害額が最も大きかったのはクルマエビ養殖の2億4千万円で全体の84.4%を占め、次にスギ養殖の3千万円、マダイ養殖の4百万円の順であった(表2)。
5. 魚介類の生産額に占める魚病による被害率はスギ養が28.8%と最も大きく、次にマダイ養殖の15.6%、そしてクルマエビ養殖の7.8%の順であった(表2)。一方、その他の魚類養殖の被害率は0.8%と低かった。その要因はマグロ養殖における魚病被害が少なかったため、マグロ養殖以外のその他の魚類養殖では被害率は高かった。
6. 平成17年度に魚病被害を起こした主な疾病はクルマエビ養殖のビブリオ病とフサリウム症、スギ養殖の類結節症、マダイ養殖の白点病とイリドウイルス病、そしてヤイトハタ養殖ではイリドウイルス病とエラムシ症であった(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 魚病の発生と被害の状況を明らかにすることによって、魚病のまん延防止と被害の軽減化が図れる。
2. アンケートや聞き取り調査の回収率は海産魚類では7.6～74.4%、クルマエビは47.8～100%、そして淡水魚類では50.0～100%の範囲で変動したこと、被害金額の算定が養殖業個人の判断によって行われていることを考慮する必要がある。

[具体的データ]

表1 養殖魚介類の魚病被害金額の推移

魚種	単位は万円					合計	率(%)
	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年		
海産魚類	3,076	776	602	1,581	4,419	10,454	9.8
クルマエビ	5,800	34,347	21,331	10,413	24,208	96,099	90.0
淡水魚類	50	90	12	24	60	236	0.2
合計	8,926	35,213	21,946	12,018	28,687	106,789	100

表2 平成17年度の魚介類の生産額、魚病被害額、生産額に占める被害率

養殖魚種	生産額(A) (千円)	魚病被害額(B) (千円)	被害率(%) (B/A × 100)
クルマエビ	3,100,892	242,080	7.8
スギ	103,106	29,730	28.8
マダイ	26,019	4,070	15.6
ヤイトハタ	57,820	2,899	5.0
その他の魚類	929,971	7,489	0.8
ウナギ	73,957	600	0.8
合計	4,291,766	286,868	6.7

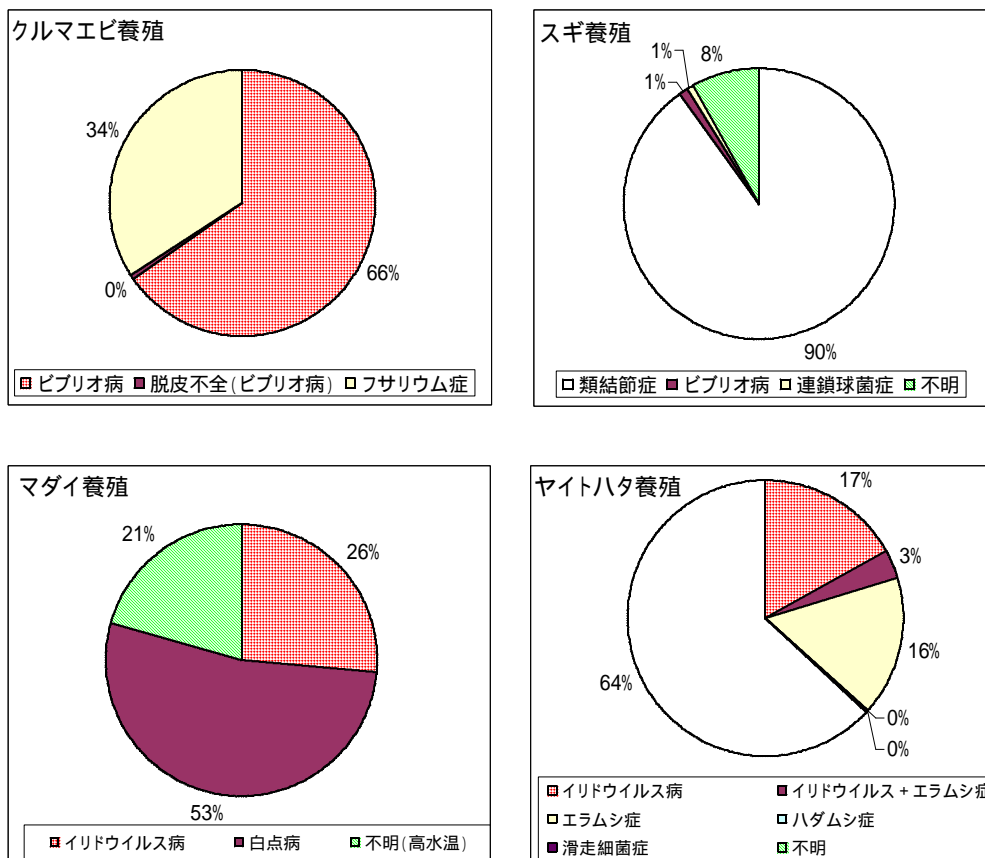


図1 平成17年度の魚介類養殖における魚病種類と被害の状況

[その他]

研究課題名：養殖衛生管理体制整備事業

予算区分：国庫補助

研究期間：平成13年度～平成17年度

研究担当者：玉城英信・中村博幸・杉山昭博・小澤明子

発表論文等：平成13年～17年度 沖縄県水産試験場事業報告書